



▲ 公園の草地での刈り残しの例

公園や保全地域の生物多様性を回復させる事業で、作業内容の相談や評価を引き受けることがあります。成功事例に出会って心強く感じたり、活動へのヒントを得たりもしますが、残念ながら、見ていて歯がゆい事例もけっこうあります。典型的なのは、実施規模が小さすぎて生物多様性が回復しない「目標の小さい取組」です。今回は目標の小さい取組の功罪（いや、功はないか？）と、生物多様性の回復作業について、普段わたしが会議などでお話していることを紹介します。

バッタは「刈り残し」で保全するもの？

◆刈り残しとは

公園などで生物多様性に配慮した草刈りの方法として、草地の全体を刈らずに一画を柵で囲って残しておく「刈り残し」が行われています。草丈の高い草地に生息する昆虫等を保全するために、柵内では刈り取り回数を少なくするか、根元から刈らずに茎の中ほどで高刈りします。取組の趣旨説明や、「バッタの草地」といった愛称を掲示していることが多いようです。

◆昆虫は狭い草地にいろと言わんばかり

公園の管理者などから、刈り残しの技術的なことを質問されることがあります。刈り残しの広さ、高刈りする場合の高

さ、刈り取りの時期、刈り残し箇所の配置といったことです。

話を聞いてみると、草地管理のテクニック以前に、方針を考え直したほうが良い場合がよくあります。刈り残す面積が小さすぎるのです。園内のトイレくらいの広さしかないことが多く、草地の1パーセント程度しか確保されていなかったりもします。

草地生の生物が生息するのに必要な面積は種によってさまざまなので、トイレレベルだから一概に狭いとは言えません。ただ、少なくとも来園者の視点で言えば、「原っぱ」に見えるくらいの広がりがないと、草地の生物多様性保全の取組だとは思わないでしょう。

◆保全と利用の場所を分けなくていい

公園の管理者が草地で保全を想定している代表的な生物はバッタでしょう。バッタは、手にとっての観察やあそびの対象として親しまれており、来園者はバッタを通して、自然体験というサービスを楽しんでいます。こうした生物を柵で囲って人の利用空間と棲み分けするようなゾーニングは適当ではありません。

そうは言っても、狭い範囲にいるバッタに対して来園者の利用圧（採集圧）がかかりすぎると、バッタは減少します。わたしが提案している管理方法は、園内の草地全体をバッタの生息地と捉えて、バッタの生息数を増大させることです。来園者が休憩やボール遊びをする区域では従来通りの草刈り回数を保ち、草丈が伸びていても支障のない区域では草刈り



▲ 草丈が高い時期は、虫さがして人気のスポットになります（都立光が丘公園）



▲ 草刈りをしなかったためにクズとセイタカアワダチソウに覆われた場所。こういう環境に棲む昆虫もありますが、保全目標はそうではなかったはず……

の回数を減らします。バッタは園内の草地全体に生息しますが、区域によって生息密度に濃淡ができるでしょう。バッタの生息密度が「濃」「特濃」の範囲を多くできれば、多少の虫捕りなどは問題になりません。

新しい世代の公園管理者には、「バッタならあちらの保護ゾーンにいます」という二〇世紀的な発想から抜け出した、新たなチャレンジを期待します。

◆刈り残す場所は固定しない

「刈り残し」をする区域をまったく刈らない、あるいは下部だけ刈り残すような管理を続けていると、樹木の実生や外来植物、ツル植物が増加し、当初想定していたバッタの種類が減少します。

草地を維持するためには、草刈りなどの作業を行い、遷移をときどきリセットする必要があります。草を刈ってからの日数の経過に応じてバッタの生息密度が変化していくという見方がわかると、刈り残しや高刈りにはこだわらなくてもいい、ということが腑に落ちるでしょう。



▲ 朽木積み

朽木を積むと昆虫が豊かになる？

◆朽木積みとは

伐採した木を一定の長さに切断して積んだものを、朽木積み、丸太積みなどと呼びます。管理作業で発生した材を自然に分解させていく過程で、昆虫やキノコの生息場所になります。

朽木積みは、庭や学校につくられたビオトープのように、もともと朽木のない小さな空間に設置すると、生物種数の増加に貢献します。公園に朽木積みを作る相談がときどきありますが、一般的に、公園のような広い自然の管理においては、朽木積みは生物多様性を向上させる方法にはなりません。

◆朽木積みは「観察装置」

公園にある朽木積みの規模は、材の大きさにもよりますが、枯れ木や倒木 1～2 本分で作られたものをよく見かけます。

もともと園内にあった 1～2 本の朽木を切断して積んでも、園内に存在する朽木の総量は変わりませんから、朽木を利用する昆虫等が目に見えて増加することはありません。朽木積みによって生物多様性を向上させるには、園外から大量の材を搬入して朽木の総量を増やす必要があります。

朽木積みは、すでに生息している昆虫等を、人が見やすい位置で観察・学習するために自然観察施設に設置される装置です。観察装置が生物多様性を増加させるわけではないことに留意する必要があります。

◆生物多様性を減少させないという視点

公園での生物多様性の取組は、生物多様性を増加させることに意識が向かいやすいですが、まずは「生物多様性を減少させない取組」をすることが大切です。

園内の生物多様性がなぜ減少しているのかと言うと、管理作業や整備の方法が生物多様性にインパクトを与えていることも一つの要因です。都市部にある公園で枯れ木や倒木が発生すると、速やかに片付けて園外に搬出し、廃棄物として処分する、という流れは珍しくありません。日常的な公園管理で朽木を減らし、別途、生物多様性の取組として朽木積みを作る、といったちぐはぐなことはやめたほうがいいでしょう。

朽木積みを置くのは生物多様性の増加ではなく、公園の維持管理作業で生物多様性を減少させないための工夫だと考えると、しっくりきます。倒木などが発生したら、公園利用の支障にならない林の中などに転がしたままにするか、切断して積んでおいたらいいいのです。自然に分解処理するという方法は、低コストで、余分な CO₂ を排出せず、物質循環的にも理に適っています。日常の管理作業による生物多様性へのインパクトを、今一度点検してほしいと思います。



▲伐採した木を林内に残置している例。コストをかけて園外へ搬出する必要がありません



▲安全性に配慮しながら立ち枯れ木を残している例
枯れ木・倒木は即撤去！……しなくてもいいのでは？



▲放置されているヨシ原
過密になりすぎて、ヨシ自体も弱っている状態

なぜ、小さく取り組んでしまうのか？

◆小さい取組には先がない

わたしが「目標の小さい自然再生」と呼ぶ取組について、取り組むのは良いことなのだからあまり厳しいことを言うな、という意見がありますが、小さい取組は本当に良いのでしょうか？

湿地の再生活動では、遷移が進んで荒廃している湿地の、ごく一部の再生に大きな労力を注ぎ、背後にある広い湿地が放置されていることがあります。再生した場所にいる生物は、背後の広い湿地に依存している種も多いですから、背後の湿地が今よりもさらに荒廃すれば、生物多様性は先細っていきます。再生湿地に注いでいる労力の何分の一かを背後の湿地に振り分け、湿地の広い範囲に低頻度の攪乱を起こしていくことが、生物多様性を長持ちさせることとなります。

趣味でやっている活動なら、湿地の一部分に労力を注ぎ込むのも結構ですが、公共事業として行われる生物多様性の取組がそうではいけません。今ある自然を保全するだけでなく、回復軌道に乗せていくネイチャーポジティブの観点からも、積極的な取組を進めていくことが必要です。

◆都合のいい専門家ではいけない

目標の低い自然再生はなぜ行われてしまうのでしょうか？近年は公園等でも生物多様性の保全が求められるようになっていますが、その担い手である公園の管理者や、取組内容を提案するコンサル会社、活動団体の認識が十分に育っているとは言えません。こうした中で、生物が増えそうだと思う「何かで見た方法」が表面的な理解のまま実施されている状況があります。また、生物多様性保全は、生物が増えそうな「ちょっと良いこと」を少しやればいい、という認識もあるようです。新しい取組が定着する初期段階は、こういうものかもしれません。

そうであればこそ、専門家と呼ばれる人の役割は重大です。草地の刈り残しの方法を聞かれて、「ショウリョウバッタとシブイロカヤキリが生息する草丈の違いは……」などとペラペラしゃべってしまったら、小さな刈り残しができただけで終わってしまいます。朽木積みをどこに置いたらいいのかと聞かれて、「草地よりは林のほうがいいですね」などと安易に教えていたら、朽木積みが二つくらいできて終わってしまいます。専門家には、生物の知識を教えることよりも、生物多様性保全にとって本質的で意味のある提案をすることが期待されます。